

今日は6月の第2日曜日。6月の第2日曜日は、教会では「子どもの日・花の日」と呼んでおります。それでは、教会の「子どもの日・花の日」というのは、どのようなものなのでしょうか。

私が今行っております共愛学園という学校で使っている教科書(高校1年生の教科書「キリスト教入門」創元社)には、「子供の日・花の日」について、こんなふうに書いてあります。

子供の日・花の日(6月第2日曜日)

アメリカの教会で、1856年6月に始まった行事です。アメリカのマサチューセッツ州のレオナルド牧師が、子供たちが信仰を持つように願って、子供の礼拝をしました。この行事は、全米に(アメリカ中に)広がり、やがて教会の行事として「子供の日」が生まれました。(また、続けて、このようにあります。)

1870年に同州(マサチューセッツ州)のローヴェル市の会衆派教会で、子供の日に花を持ち寄って礼拝しました。このことも他の教会に広がり、子供の日を「花の日」とも呼ぶようになりました。

(そして、こんな簡単なコメントがついています。)

子供たちが、教会堂を美しく飾っている花を見て、神の愛を知り、その花を持って病院や施設を訪問してキリストの愛の精神を学びました。この行事が日本の教会に伝えられたのです。(日本には、明治の中頃からこの習慣が入って来たと言われていました)

「子供の日・花の日」、大体、分かりましたでしょうか。まあ、毎年お話しておりますから、知っているという人も多いと思います。

ということで、今日は「子供の日・花の日」ということで大人の人たちと一緒に礼拝ですけれども、今日は「花の日」にちなんで、「お花」についてのお話を少しばかりしてみたいと思います。

花と言いますと、花言葉というのがあるのをご存知の方もいると思いますが、知っていますか。例えば、バラの花は純愛、ユリの花は純潔、また、オリーブは平和とか、花の特質(特徴)によっていろいろな意味を持たせることがあります。キリスト教にも、花言葉みたいなものがありまして、例えば、カーネーションは、母親の愛のシンボルとして考えております。十字架につけられたイエス様を眺める母マリア(聖母マリア)が悲しみのあまり、血の涙を流し、それが地に落ちて、そこにカーネーションが芽生えた、という伝説などから、カーネーションは母親の愛のシンボルと考えられるようになりました。

また、白百合というものがありますけれども、純白無垢の白百合(真っ白な白百合)は、聖母マリア(イエス様のお母さんのマリアさん)のシンボルで、よく受胎告知の絵(マリアさんが、天使からイエス様が生まれますよと告げられている絵)なんかに描かれています。また、白百合は球根から芽が出て花が咲きますので、永遠の生命を表し、復活のキリストのシンボルにもなりました。イエス様の誕生や洗礼の絵などによく描かれています。

また、花とはちょっと違うかも知れませんが、茨(とげとげいばら)というものもあります。茨はイエス様が茨の冠をかぶせられたので、ローマ皇帝のばらの冠と対比して、茨はイエス様の受難、苦痛のシンボルとなりました。(茨の旗は荊冠旗(けいかんき)など

と言います。)

(省略)(また、これも花とはちょっと違いますが、ぶどうの房というものも教会ではよく見かけますね。ぶどうの房は、聖餐の葡萄酒のシンボル。また、イエス様が「私はぶどうの木、あなた方はその枝である」(ヨハ 15:5)と言われたことから、イエス様ご自身のシンボルでもあります。)

まあ、「花」と申しまして、今日は、このような花言葉のお話ではなくて、口に筆をくわえて花の絵と詩を描いている星野富弘さんという人のお話をしてみたいと思います。星野富弘さんについては、ご存知の方も多いと思いますが、群馬県の人ですし、東村に富弘美術館というものも出来ておりますから、行った人もいると思います。

で、星野富弘さんですが、富弘さん(1946～)は、群馬大学教育学部を卒業し、すぐに高崎の倉賀野中学校の体育の先生になりました。でも、わずか二ヶ月後に、クラブ活動で器械体操の模範演技をやっている時、誤って墜落して首の骨を折ってしまいました。一時は危険な状態に陥りましたが、何回もの手術の結果、やっと命は取り留めました。しかし、肩から下は麻痺して指一本動かすことの出来ない寝たきりの状態になってしまったんでありますね。富弘さんは生きることも死ぬことも出来ず絶望して心はずさみ、日夜付き添って看護してくれるお母さんに当たり散らし、何回もお母さんを泣かせたそうであります。

でも、富弘さんは、神様の御言葉に触れ、イエス様を信じて、1974(昭和49年)洗礼を受けてクリスチャンになりました。その後、富弘さんは非常に意欲的になり、口にサインペンをくわえ固定したスケッチ・ブックに字や絵をかく練習をし始め、文字通り血のにじむような努力をして立派に詩や絵がかけるようになりました。そして、1979年、前橋で最初の作品展を開き、その後、各地で「花の詩画展」を開きました。また、1981年には結婚され、1991年、東村に村立富弘美術館が出来ました。

「愛、深き淵より」「風の旅」「かぎりなくやさしい花々」「鈴の鳴る道」「銀色のあしあと・三浦綾子との対話」「速さのちがう時計」「あなたの手のひら」など。いろいろな本、詩画集を出しています。

富弘さんが、お母さんへの感謝と苦難に打ち勝った平安について次のような詩を、きれいな絵とともに書いています。

「風の旅」より (ぺんぺん草、なずなの花)

神様がたった一度だけ

この腕を動かして下さるとしたら (富弘さんは手足が動かない)

母の肩をたたかせてもらおう (体も動かさない)

風に揺れる

ぺんぺん草の実を見ていたら

そんな日が

本当に来るような気がした。

四季抄「風の旅」より (つばきの花) 共愛の教科書(高3用)

木は

「聖書と人間 3」

自分で動きまわることができない

神様に与えられたその場所で

精一杯 枝を張り
許される高さまで
一生懸命 のびようとしている
そんな木を
私は友達のように思っている

富弘さんは、手も足も動かない、動かせない。電動式車椅子で、外に散歩に出ることはあっても、したいことも自分では出来ないんですね。ご飯も食べさせてもらわないと食べられないし、歯も磨いてもらわないと、自分では磨けない。顔を洗うことも出来ない。とっても大変です。でも、その大変な中で、口に筆をくわえて、一生懸命絵を描き、詩を書いている。富弘さんの絵と詩を見て、感動した人たちが沢山います。富弘さんの絵と詩に励まされた。勇気を与えられた。力を与えられた。元気が出てきた。そういう人たちが沢山いるのです。

こんな詩もあります。

「花の詩画集」あなたの手のひら (1999年4月) (つわぶき)
悲しくて花を見れば
花はともに悲しみ
うれしくて花を見れば
花はともによるこび
こころ荒れた日 花を見れば
花は静かに咲く

花は、とても不思議です。きれいだけではありません。人を慰め、励まし、元気を与えてくれる不思議な力があるのです。

今日読んでいただいた聖書には、こんな言葉がありました。「兄弟たち、あなたがたに勧めます。怠けている者たちを戒めなさい。気落ちしている者たちを励ましなさい。弱い者たちを助けなさい。すべての人に対して忍耐強く接しなさい。」

星野富弘さんは、自ら一生懸命生きることによって怠けている者たちを戒めています。また、花の絵と詩を通して、気落ちしている者たちを励ましています。また、弱い者たちに勇気と希望を与えています。そして、自由に動けない、寝たきりの状態の中でも、じつと忍耐強く我慢し、一生懸命絵と詩をかいている。

今日は、礼拝後、みんなで「花の日の訪問」をしたいと思いますけれども、みんなのやさしい気持ちをお花にたくし、やさしい心、思いやりのある心をもってお花をプレゼントしたいと思います。